

「ふるさと、どんどん、ちかくなる ー大好きな、だいすきな、近江ー」

澤田 康彦 氏（編集者・エッセイスト、『暮しの手帖』前編集長）

2020年2月11日 琵琶湖ホテル

こんにちは。そして、ただいま！（会場「おかえり〜」）。

まず大あわてで白状しますが、私自身は18歳まで滋賀県におりましたものの、ずっと「東京東京」と言い続け、大学の進学から上京し、そこからもう40年以上、東でうろうろしていた身です。このたび、『暮しの手帖』の仕事を終えて、家族の住む京都に戻ってきました。

実家は東近江市、旧神崎郡能登川町で、母は90歳、今も元気にしており、僕は家族と能登川に通うことも多くなると思います。会場の皆さんはほとんどが滋賀県の方で、僕よりも確実に滋賀をご存じだと思います。ですので、極めて心もとない講演になるかと想像されますが、それでも一つ二つくらい何かのヒントは持ってかえっていただきたいと願って、種々雑多の資料を用意してみました。

さて（スライドを見せて）これは何でしょう？（会場「……びわこ？」）そう琵琶湖です。逆さ琵琶湖。上下逆にするとヘンですね。僕は煮詰まったとき、何かを新しく考えてみるときに、対象物を裏返したり逆にしたりします。モノゴトは違うところから全体を見ていった方がより新しい発見ができる。比喩的な意味で申していますが、地形なんかはこう具体的にくるっとできる。今はグーグルアースがあって楽しめますよ。富山県庁で売っている「逆さ日本地図」なんか有名ですが、多くの県は逆にすると急にどこかわからないヘンテコな形になったりします。北が上だなんて誰が決めたんでしょうね？

さあ滋賀県について。僕は62歳ですが、18年間いた時の思い出が今や濃いエッセンスとなって凝縮され、自分の中に残っていることを強く感じます。まずは滋賀と言えば、の短歌から。

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのいにしへ思ほゆ 柿本人麻呂

大きな「海」があって、夕波が立って、千鳥が鳴いたら、心がなんか頼りなくなって。昔の歌人もここを見ていろいろと思ったのだろうなということを、琵琶湖を前にして歌った和歌です。琵琶湖の夕景は美しすぎて本当にいろいろ思わせますよね。財産ですね。

たっぷりと真水を抱きてしづもれる^{くら}昏き器を近江と言へり 河野裕子

彼女の代表歌のひとつでしょう。一読して、あ、そうやな。琵琶湖は周囲が山に囲まれた真水の容器で、「昏き器」という言い方は非常にうまいなと。天候や地形もそうでしょうが、古代史以降この土地で繰り返されたであろう日本の閉じた歴史もしのばせる歌ですね。

散文の文字や目に^ふ零る黒霞いつの日雨の近江に果てむ 塚本邦雄

塚本さんは、五個荘町出身。「前衛短歌の三雄」と呼ばれる歌人です（注：あとの2人は寺山修司、岡井隆）——小説家の外村繁さんも五個荘で、豪商とともに文学者の出た豊穡の土地ですね。僕は帰省して、雨が降ると、よくこの歌を思い出します。文字が見づらい年齢になり、目がかすみ、外はざあざあ雨……いつここで死ぬのか？

優れた短歌には、必ず陰翳^{いんえい}があります。この三首にも。「翳」という感覚に、近江という風土はともフィットしているように感じるんです。詩のできやすい土地なのでしょう。

僕は、雑誌や本の編集者、企画者をやっています。滋賀県シロウトの僕は3日前、急に思いついて信頼筋に250通ぐらいの一斉質問メールを送りました。「滋賀県のよいところ、オススメって何ですか？」「よくないところは？」……なんてことを聞いてみたんです。有能な編集者は他人のフンドシで相撲を取るのがうまい。日本全国、ロンドンやパリからも、計50通ぐらいの興味深い返事が戻って来ました。けっこうな回収率。みんなヒマなのかな？(笑) 持つべきは頼もしい友人たちですね。

「弁当『湖北のおはなし』はおいしい」というのは漫画家の伊藤理佐さん。「フローティングスクールがええねん」と地元の友人。「笑福亭福笑さんの新作落語『渚にて』の滋賀ネタがめっちゃ笑える」というのは上方落語の信頼筋。「ハコミドリって知ってます？」とか、「大津にあった旧滋賀会館シネマホールがとてもよかった」とか。東近江市に移住してきた知り合いは「地元の人には、何にもないところに何で(移住を)？」とよく言われますが、ここは本当いいところですよ。子どもが健全、教育内容は充実している。交通の便もよい。文化レベルが高い。工芸や芸術的な趣味を本格的にされている方が多い気がします。自然が豊か。琵琶湖最高」……これは褒めすぎちゃいますか(笑)。

逆に問題点は、「物価が高い」「警戒心が強い」。あと「特に男性に社交性の低い人が多いのだけ気になります」って、思い当たる人はいらっしゃいますでしょうか？(会場ざわざわ、苦笑い)

「よくないところ、そんなにないです」という人が多かったのが意外です(笑)。あるいは知らないか。問題点をあげつらってきたのは県内の人たち。いやそれは当然で、住んでいるからこそ。地元がよくなってほしいからにはほかありません。自慢できる土地でありたいんです。ここには知事はじめリーダーが大勢いらっしゃるでしょうから、ぜひこれからも文句に答えていってあげてほしいものです。

とある新聞記者からは「地図を眺めると、琵琶湖は日本列島のブラックホールのようにも思えます。いろいろなものが吸い寄せられる巨大な穴。この穴から日本がひっくり返るような楽しさを夢想します」なんてメールも。小説、映画にもなった『偉大なる、しゅららぼん』みたいです。

ひっくり返してやりたいと思いますねー。1600年の関ヶ原の戦い以降、日本全体が江戸=東京中心ものを考えて、すべてがそこに吸い込まれている現況ですので、いくらなんでもぼちぼち一回ひっくり返したい。僕の代で無理でも次の代にどうやってその感じ、価値観をバトンタッチできるのかなと考えます。そういう時、地方、僕らの滋賀県みたいな面白い土地にすることが大事なことなのでしょう。「東京東京」と念じていた人間が言うのも説得力ないのですが、逆に外にいたからこそわかるとも言えます！

話題変えましょう。『暮しの手帖』について。

これが特殊な雑誌……というのはまず広告を入れない雑誌だということです。これで僕は4年苦勞してきました(笑)。その前はマガジンハウスにおりまして、そこは広告を入れるのが当たり前の世界でした。『アンアン』なんて往時は世界一広告の入る雑誌と言われて、入り広を断っていた時代もありました。極端な話、一冊も売れなくてももうかる。それは景気がよかったからであって、今はそうではない。特に紙媒体に広告を入れるスポンサーはずいぶん減りましたね。広告主体で作ってきたメディアは現在みんな苦勞しています。広告主が神様のようになっています。

そういう浮き沈みを横目で見ながら、『暮しの手帖』は72年間、常にほぼ本屋さんでの販売収入のみで生きながらえてきた雑誌なんです。売れないとつぶれるという綱渡りの歴史。売っていた頃は100万部近くまであったのですが、世の趨勢とともに落ちて、今の発行部数は20万部程度。けれどもそれは他

誌と比べるととても立派な成績だと自負するところがあります。読者に支えられているんです。

利点はなんといっても、読み手のことだけを考えればよい、という点でしょう。スポンサーにヨイシヨシなくてよい、付度ゼロでOK、入れたい記事だけを追求できる……なんて冷静に考えてみれば当たり前のこと、原点ですよ。『暮らしの手帖』は取材予算は少ないし、広告のない分、物理的に編集ページは増えるし、さらには伝統の検証作業——レシピ通り料理が再現できるかなど——が必要と、そういったいろんな課題があるのだけど、何とんでも作り手が真っ直ぐでいられる気持ちよさがあります。

テレビドラマの『とと姉ちゃん』で知ようになった若い方も多いでしょうが、創業者の大橋鎮子や、編集長の花森安治が1948年、不幸な戦争を二度と繰り返さないため、一人一人の暮らしを大切にする雑誌を作りたいという思いから生まれました。という硬いのですが、貫かれている精神は「美しいものを」という美学に尽きると僕は思っているのです。

「美しいものは、いつの世でもお金やヒマとは関係がない。みがかれた感覚と、まいにちの暮らしへの、しっかりした眼と、そして絶えず努力する手だけが、一番うつくしいものを、いつも作り上げる」

これは、創刊号の花森安治の言葉ですが、今に至るまでその価値観に貫かれています。敗戦後の日本に立ち上がった彼は本当に天才だったと思います。衣装研究者であり、絵描きで、デザイナーで、写真も撮る。庶民の味方、反骨のジャーナリスト、原稿はもちろんキャッチコピーの名手。そんな人物が編集長だった。あとにも先にも、そんなあり方で、広告も入れず数十万部を70年売り続けたようなメジャー雑誌は世界にもありません。こんな文章があります。

ぼくは、〈暮らし〉という日本語が好きなのです。美しいとおもいます。いくつにもたたまれ、しわだらけになり、手あかにまみれた千円札、あれをじっとみていると、これをたたんだりのぼしたりしてきた、おおぜいの人の指が、目にうかんできます。たのしそうな笑い声や、身を切られるようなため息が、きこえてきます。うすぐらい灯の下で煮えている食べものにおい、青空にひろがってゆく石けんのおい、がにおってきます。〈暮らし〉という言葉には、そんなふうな、あたたかさ、せつなさがこめられています。(1世紀71号「編集者の手帖」1963)

しわだらけの千円札から、笑い声だけではなく、「身を切られるようなため息」「せつなさ」にまで思いを馳せる、それが花森安治であり、『暮らしの手帖』だということですね。

普通の雑誌ですと、よく芸能人・文化人を出します。テレビなんてもっとそうですね。なぜ出すかという、人気があるから。カッコいい、華やかな、あこがれの人たち。ああんりたい、もてたい、お金持ちになりたい、褒められたい、痩せたい……そういった欲望の先の花々だからです。

それは資本主義的な欲望ですね。よりいいものを買いたい、ブランド品で身を固めたい。そういう「媒体」にはスポンサーが広告費を入れてくれるわけですね。循環が生まれる。それを僕は悪いと言っているわけでは全然ありません。需要の先の当然の供給ですから。けれども、すべてのメディアがそれ一辺倒というのは危険ですよ。いまの日本全体の、同調圧力のもとになっているように思います。

そんな価値観を揺さぶってくるような雑誌を作りたいというのが目指すところ。まあ、もちろんそんなうまくいっているとは言えませんが、目指し続けております。ですから、作っていて意義を感じていましたし、とても面白かったです。スタッフも多くはとても楽しげに仕事をしているように思います。僕の思う、編集長の仕事とは、いいもの、美しいものを作り続けることに専念できる現場・空

気をつくること、というものかな。

企画は机の上ではなく、現場から生まれると思っています。たとえば特集「自然薯を掘る」。これは銀座の焼き鳥屋の大將の「サワダさん、自然薯掘りに行こうよ」という誘いに乗った結果の記事です。70代のこの大將は、夜は黙々と鶏を焼き、オフは好きなことをやってる。季節に合わせ、自然薯、アユ釣り、イカ釣りと、楽しく生きてるんです。「自然薯はハツっちやダメだよ」。ハツるというのは削ること。何ですか？ って聞いたら「美学です！」って。ここにも美学って言葉が飛び出しました。

福井県勝山市のさぎっちょ（左義長）祭り、石川県白山市の山奥の素晴らしく美味しい伝統の山菜・きのこ料理、徳島県吉野川流域の「川の学校」……さまざまな面白いことを取材してきました。有名人でなくても、いい顔の人たちは、すばらしく写真映りがよく、リアルに魅力的なんです。

私は、けっこう遊んできました。自慢できることはあまりありませんが、それだけは言えるかな。公私混同、仕事と遊びの境界線もなかったように思います。魅力的な大人、先輩がいっぱいいましたね。代表的な人物は作家の椎名誠さんで、「怪しい探検隊」というキャンプにドレイ隊員として連れていってもらったり、一緒に映画を撮ったり。あちらこちらを訪ね、地元の人たちと生で接し、遊び方楽しみ方を学びました。何をするかではなく誰とするか、誰と遊ぶかということがキモかな。そんな楽しい遊び・仕事は形を変えて、次の遊び・仕事につながってゆく。自分が得た哲学といえばこれだと思います。

整理すると、大切なもの・ことは、上から下へ、先代から次代へきちんと伝えていく。体育会系なものにはイヤなのですが、先代が学んだ知恵は絶対にある。それを上は偉そうに押しつけるのではなく教え伝えていかなければいけないし、受けとるほうもちゃんと謙虚に尊敬して受けとってほしいなということ。今はこのシステムが壊れている気がするんです。核家族化になり、おばあちゃん、おじいちゃんが家から離れてから、人間の当たり前、ルールの伝達がうまく行かなくなっているのではないかと危惧しています。子どもたちに「暮らし」の感覚がなくなっているのではないかなと。いい点を取るため、いい学校に行くため、勝ち抜くために進学塾とかばっかり行かせてたらアホになります。

『暮らしの手帖』は100号で新しい世紀にリセットされます。去年は第5世紀1号で「自分らしさについて考えてみよう」という特集を組みました。これは非常に難しい問いかけでしょうね。自分らしさって見失いがち。「空気を読め」という言葉が大手を振って歩いていて、読めない人はダメな人のように排除されていく。僕はむしろ読もうとしてはいけないのではないかと今は思っています。いじめの基本もそこにある。(スライドの)《空気は読まない》ってこの文をパソコンに打ちこんでいたら、中1の娘がたまたまのぞいて「そんな無理やわ……」とひと言言って去っていきましたねー(笑)。

人と同じことをしてないと不安だという感覚が強くなっていませんか。これは怖い。日本はそういう国。スーツ、ネクタイ、車の色、スマホ、通勤通学、オリンピック、政治的発言、価値あるものもタブーもほぼ一色に近い気がします。違いがあるのが面白い。だから面白い土地になる。国になる。人間というのはもっと互いを認めて信じて生きたい。おおらかに寛容にいたいと思うんですね。

だから、東京中心の考えにもバイバイしたい。京都、滋賀に戻ってきてまだ短期間ですが、独自の独特の面白いこと、発想が生まれていることを既にいくつか目にしてきました。大事なものは持続性、一代で考えずに、子どもや後輩、後進につないでいきたいものですね。

だから、出会いがとても大事です。毎日誰かと出会っています。今日なんかも、そうですね。(会場を見回して)大勢の人たち。もうすでにいろんな方に出会いました。

たっぷりと真水を抱きてしづもれるこの地から、一緒に新しい何かを生み出すことを誓い合って、本日の講演を終わりたいと思います。ありがとうございました。

*本稿は講演録を元に加筆訂正を行ったものです。